

卷之六

はしがき

和泉式部日記

紫式部日記

新編更級日記

贊枝典詩一已

蜻 蛭 田 記

蜻蛉日記は右大将道綱母（陸奥守藤原倫寧の女。藤原兼家の室）の日記である。作者の夫兼家は当時の貴族の習俗に従つて、他に藤原仲正の女（これとの間に道隆・道兼・道長・超子・證子が生まれた）、藤原国章の女、町の小路の女、小野宮実頼の召人近江等多くの妻妾を持つていたが、作者は、夫を愛するが故に（兼家も亦明らかに作者を強く愛していた）、その愛がらの不安を除こうが為に愛の独占を執拗に希求して、夫に対しても妬み、怨み、焦り、あらがいつづけた。この日記はその苦悶の心境を告白している。記事は天暦八年（九五四）二十六歳の兼家が通い初めて互に和歌を贈答した夢心地の頃から始まり、翌年の道綱の誕生の事、新しい愛人ができて兼家の愛情の薄れゆく次第、そのなげき、鳴滝・初瀬・石山詣のこと、道綱の成長、それに伴う母性のめざめ、兼家が忠志の女に生まれた子を養女として引取った次第、養女への右馬頭の懸想などを叙し、天延二年（九七四）二十歳になった道綱が賀茂の臨時祭に舞人になつた時の姿を描いて終っている。要するにこの日記は前後二十一年間に亘る夫婦愛の生活の破綻による懊惱を主題として描いたいこじなまでに自我の強い女性の私小説的作品というべきものであるが、後半作者が一子道綱に対する母性愛に目覚めて、次第に平静な心境にたどりつく過程にも文芸として注目すべきものがある。書名は上巻の終に「かく年月は積れど、思ふ様にもあらぬ身をし歎けば、声改まるも喜ばしからず、猶物はかなきを思へば、有るか無きかの心ちするかげろふの日記といふべし」とあるのに基づく。かげろふは、正しくは「陽炎」を当てるべきであろうか。この日記の伝本は、近世をさかのぼるものはないうえに、そこぶる誤脱とおぼしき個所が多くて、いまだに十分整えられていない。ここでは宮内庁書陵部御蔵本をもととし、上村悦子博士の校本を参考したが、意の通じない個所については、いちおう諸説によつて改めたところも若干ある。ここに抄出したのは、天禄二年（九七一）西山に籠つて尼になろうとして果さなかつた時の記事の前半である。

一 天禄二年。兼家四十三歳。作者三十六歳ぐらい。道綱十七歳。
 二 殿は御物忌ですから、文通は慎むべきですが、内々で御門の下から。
 三 兼家の手紙。
 四 あなたが物忌での住みかはひとつごうのわい所であるようだったから、行けない。
 五 作者がこゝ（作者の邸）にかえつて来ていると。
 六 大変珍しいお手紙は、どなたからのか判らないほどでした。
 七 「それにしても以前おいでになつた所に私がこうしているとはお思いかけもなきらしいほどの、他への頻繁なお出歩きでござりますね」の意か。（兼家は前年七月頃から近江という女の許に通つている。）
 八 出家もしないで。
 九 この様にでも兼家の行状を思い出すのもわざらわしく。

一〇 （このまゝにして、）前のように、あとでくやむようなことがきつてある。「もこそ」「もぞ」も同じは、このましからぬことがおこることを予想する意をあらわす。
 一一 京都の西郊の山々。鳴滝の般若寺をさすらしい。三 兼家の家での物忌。
 六月の朔日の日、「御物忌なれど、御門のしたよりも」とて文あり。あやしく珍らかなりと思ひて見れば、「忌は今はも過ぎぬらんを、何時まであるべきにか。住み所ぞいと便なめりしかば、え物せず。物詣では穢らひ出で来てとゞまりぬ」などぞある。ここにと今まで聞かぬやうもあらじと思ふに、心憂さもまさりぬれど、念じて返り事書く。「いと珍しきはおぼめくまでなむ。ここには久しうなりぬるを、げにいかでかはおぼし寄らん。さても見給ひし辺りとはおぼしかけぬ御ありきの度々になん。すべて今まで世に侍る身の怠りなれば、更に聞えず」と物しつ。さて思ふに、かくだに思ひ出づるもむつかしく、さきの様に悔しき事もこそあれ、猶しばし身を去りなん、と思ひ立ちて、西山に例の物する寺あり、そち物しなん、か三七にて、やがて畳紙の中にかく書きけり。
 さむしろの下待つ事も絶えぬれば置かむ方だになくぞ悲しき

一 寝所の敷物。両面共に表と縁がつけてある。
 二 翌早朝飲む薬。兼家が泊つた翌朝飲むのであろうか、「つとめて」をがまんしての意とする説もある。
 三 ふところ紙の中にはさんで入れてあつたのは、「さしれ」は「さしいれ」の約。
 四 私が、よそへ行つて（この年三月晦頃から五月初頃までよそー父倫寧の家らしいへ行つていた）こゝへ帰つて来るまで、そのまゝになつていたのだった。
 五 侍女たち。
 六 そのまま。

七 わが身を落着ける場所（薬の置き場所をかけた）さえもなくて悲しい。「なく」に「泣く」がかかるか。
 八 仲文集「いづくへも身をしかへねば雲懸かる山ぶみしてもとはれざりけり」を引くか。
 九 あなたが私の邸の門前を素通りなさるので、いっそそういうことのない場所もあろうかと思つて。
 一〇 今日山寺へまいります。二 兼家との間の子道綱。三 「これからは（西山に）ひたすらこもつてしまふであろう、その消息を父君に申上げに」というわけで、兼家邸にでかけるのに、ことづけた。三 私（道綱）も。